

# 「岩崎純一のウェブサイト」へのご訪問者の統計 (1)

## 共感覚者および共感覚の自己申告者

作成：岩崎純一

統計開始：2004/1/1 最終更新：2014/7/20

掲載サイト：<http://iwasakijunichi.net/>

### 目次

## 0 解説

### 1 共感覚者

1.1 私が面識を持った方々のうち実験や詳細な対談等で共感覚の保持の事実が確認できた人数の統計

1.2 ネット上（私のサイトや mixi・Twitter などの SNS を通じた交流）において自身に共感覚があると自ら言明した人数の統計

【参考】他の共感覚研究者による統計

1.3 男女年齢別

1.4 共感覚を得た要因

## 0 解説

本統計資料(1)および別統計資料(2)は、「岩崎純一のウェブサイト」(<http://iwasakijunichi.net/>)へのご訪問者のうち、共感覚者、共感覚の自己申告者、ICD-10 第5章 精神及び行動の障害 (F00-F99) 及び 第6章 神経系の疾患 (G00-G99) の罹患者の統計である。

当サイトでは、共感覚、精神・行動障害全般、及び神経系疾患とされる閃輝暗点を扱っており、ご訪問者にもこれらの保持者・罹患者が多いことから、統計を取ることにした。

なお、共感覚は、多くの保持者が訴える社会生活での支障・苦痛の程度が ICD-10 の各障害の罹患者のそれよりも小さく、精神障害・行動障害・人格障害・神経疾患のいずれとも認められていない。

2013年5月に改訂されたアメリカ精神医学会 (APA) の『精神障害の診断と統計の手引き (DSM)』の第5版においても、感覚保持による苦痛の程度が解離性障害など他の精神・神経性疾患と比して微小であることから、リストに組み入れられなかった。

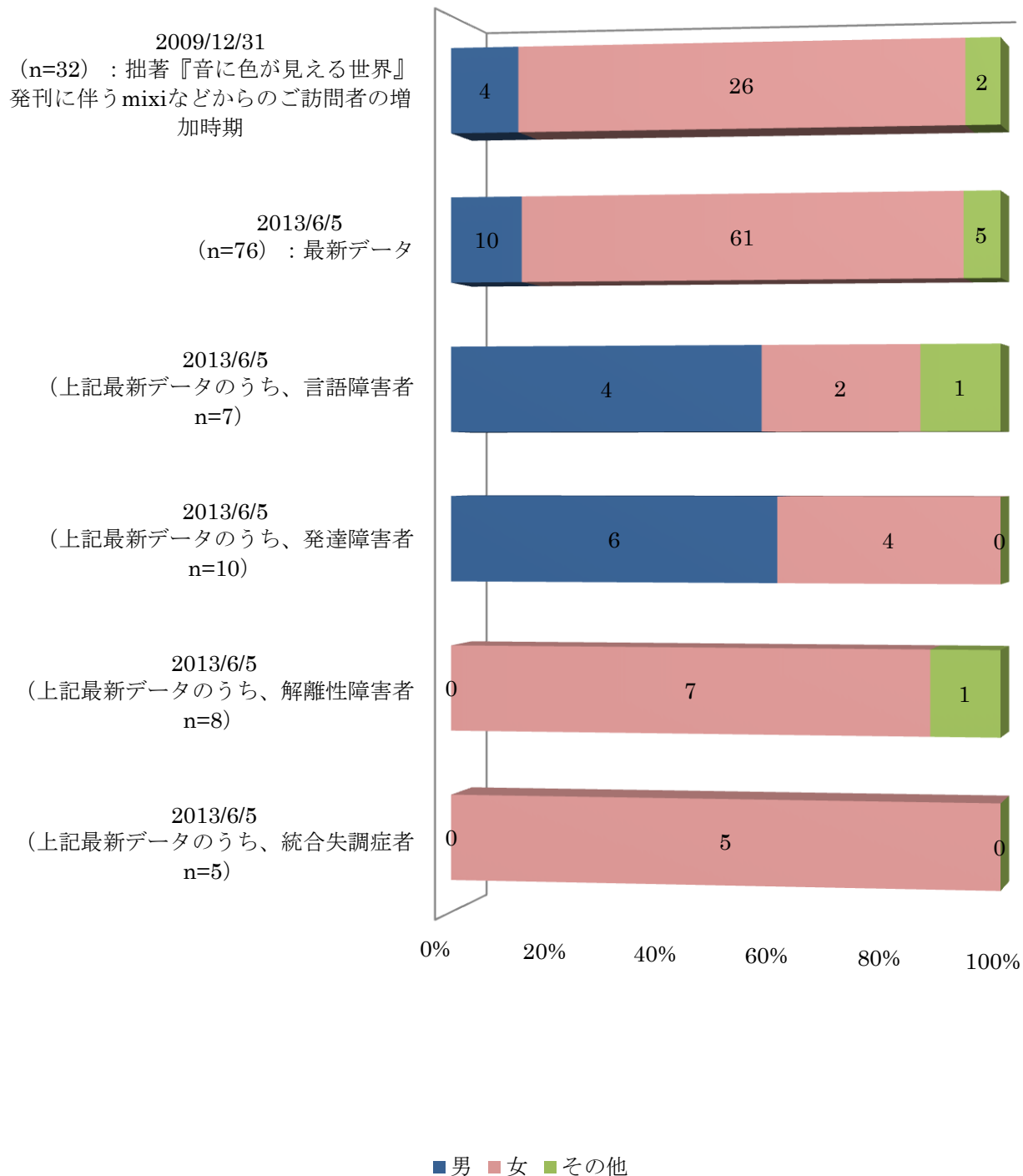
こうして、共感覚は共感覚研究の専門家のみならず、精神病理学者らによっても疾病扱いされないこととなったが、しかしそのために、「共感覚」の定義は長期に渡り極めて曖昧な状況であり、保持者の男女比についても「1対20」説から「1対1」説まで諸説乱立が続き、いずれも検証実験やアンケートの手法に疑念が残る。

当資料においては、実際に私が面識を持ち共感覚を保持することを確認した人数の統計と、ネット上 (私のサイトや、mixi や Twitter などの SNS を通じた交流) において自身に共感覚があると自ら声明した人数の統計の両方を掲載した。

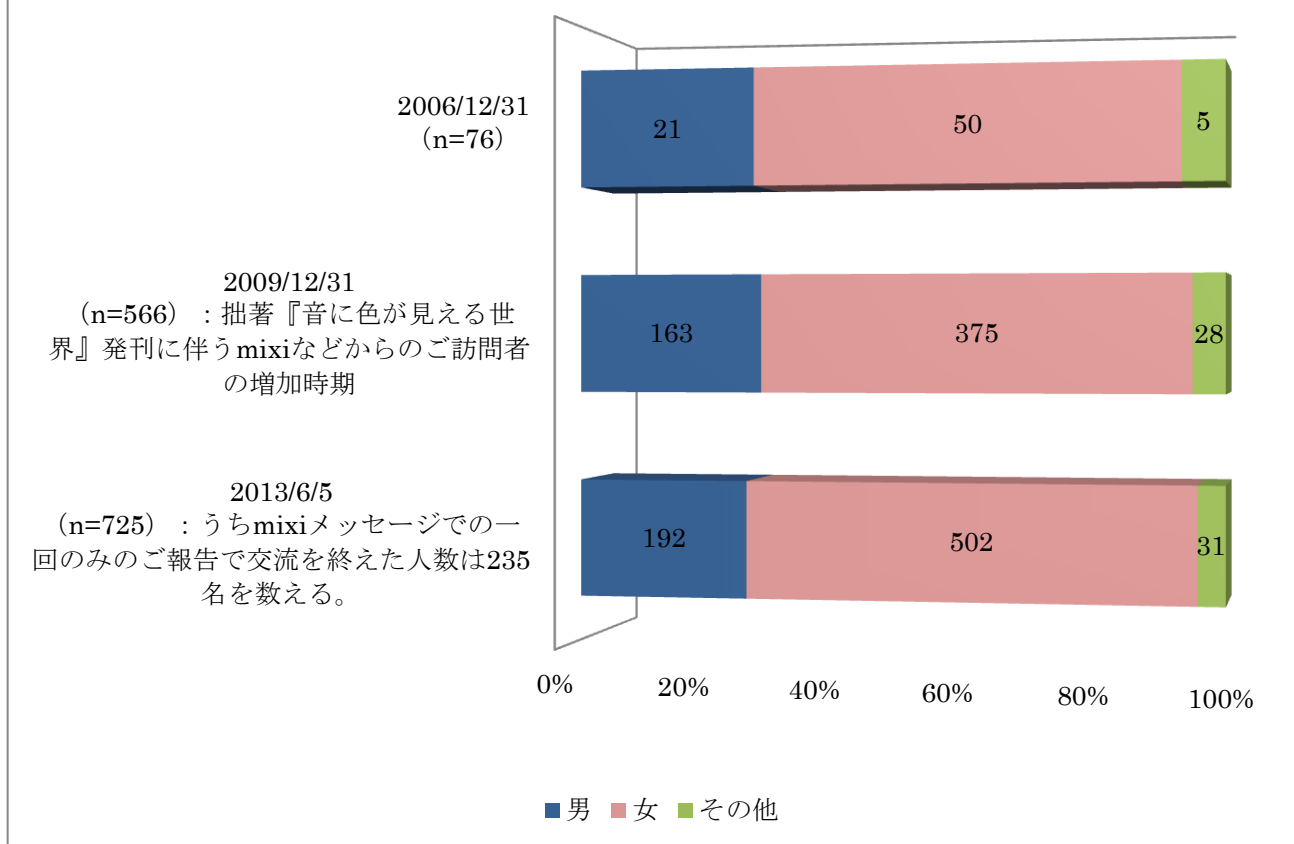
「岩崎純一のウェブサイト」へのご訪問者の統計 (2) は以下  
[http://iwasakijunichi.net/ronbun\\_ippan/homonsha\\_tokei2.pdf](http://iwasakijunichi.net/ronbun_ippan/homonsha_tokei2.pdf)

# 1 共感覚者

1.1 共感覚者（私が面識を持った方々のうち実験や詳細な対談等で共感覚の保持の事実が確認できた人数の統計） 単位（人）



1.2 共感覚者（私のサイトやmixi・TwitterなどのSNSを通じた交流において自身に共感覚があると自ら言明した人数の統計） 単位（人）



■自己申告した被験者の内訳

- 「共感覚」の語の検索などによる私のサイトへの直接のご訪問・・・約 35%
- mixi の共感覚コミュニティ、mixi メッセージからの私のサイトへのご訪問・・・約 40%
- 上記以外の被験者（知人・同僚、私の講演の聴講者、ネット非利用者など）・・・約 25%

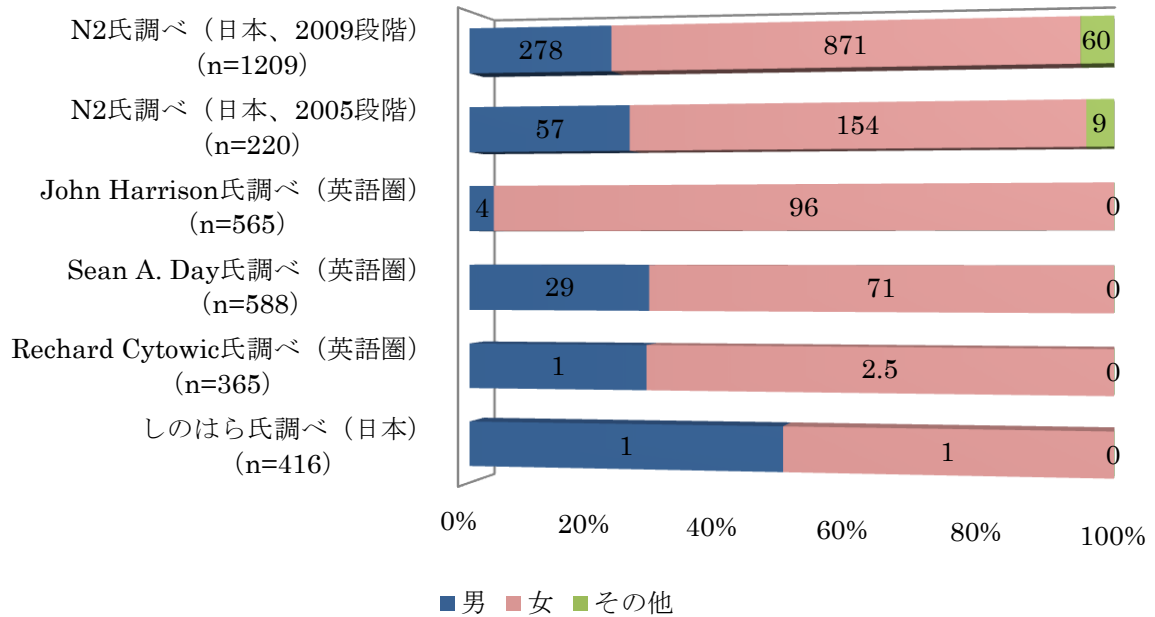
※ 自己申告者数に占める共感覚保持確定者の割合が女性で高い。

※ 「その他」には、性同一性障害者や同性愛者、性別未申告者が含まれる。

※ 「共感覚者には女性が多い」との通説（以下の【参考】）は、定型発達者・健常者（言語に障害がなく、共感覚研究者を相手にコミュニケーションをとることが可能な者）のみを調査した結果にすぎないことが見て取れる。

実際には、共感覚者の男性に言語障害・発達障害が出る可能性が極めて高いため、結果として、全体の共感覚者数の男女数の差はほとんどなくなると考えられる。私の統計においては、言語障害者や重度の発達障害者とのメール・会話には、しばしば私が考案した「岩崎式日本語」を用いている。

【参考】他の共感覚研究者による統計 単位（上部2つは人。下部4つは比。）



※ 引用元

Harrison, J. (2001). *Synaesthesia: the strangest thing*, Oxford: Oxford University Press.

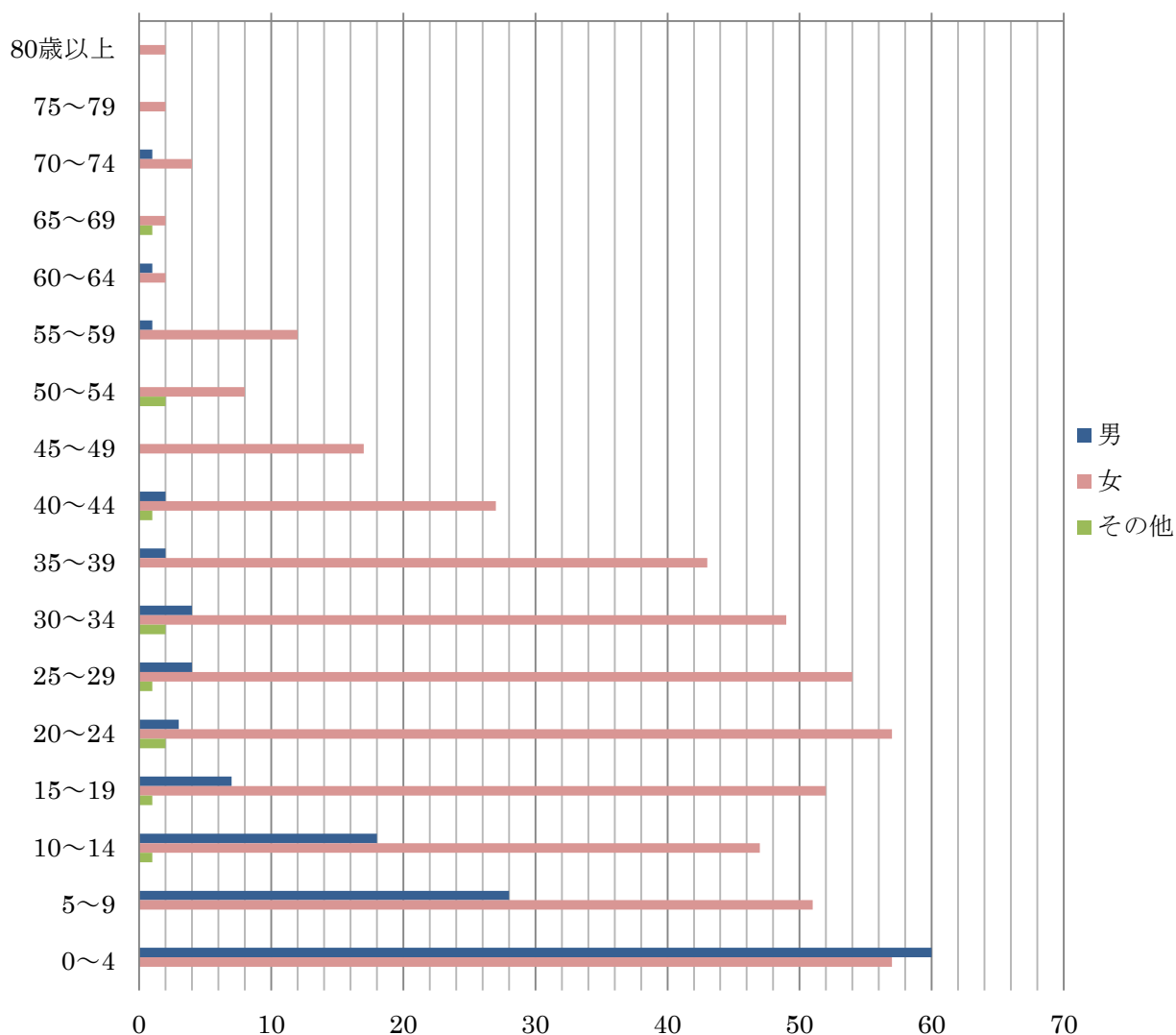
『共感覚—もつとも奇妙な知覚世界』(2006) ジョン・ハリソン 松尾香弥子=訳 新曜社

『共感覚者の驚くべき日常—形を味わう人、色を聴く人』(2002) リチャード・E・シトーウィック 山下篤子=訳 草思社

『脳のなかの幽霊、ふたたび—見えてきた心のしくみ』(2005) V・S・ラマチャンドラン 山下篤子=訳 角川書店

色聴者判定テスト <http://www.synaesthesia.jp/>

### 1.3 男女年齢別 (2014/7/20) 単位 (人)



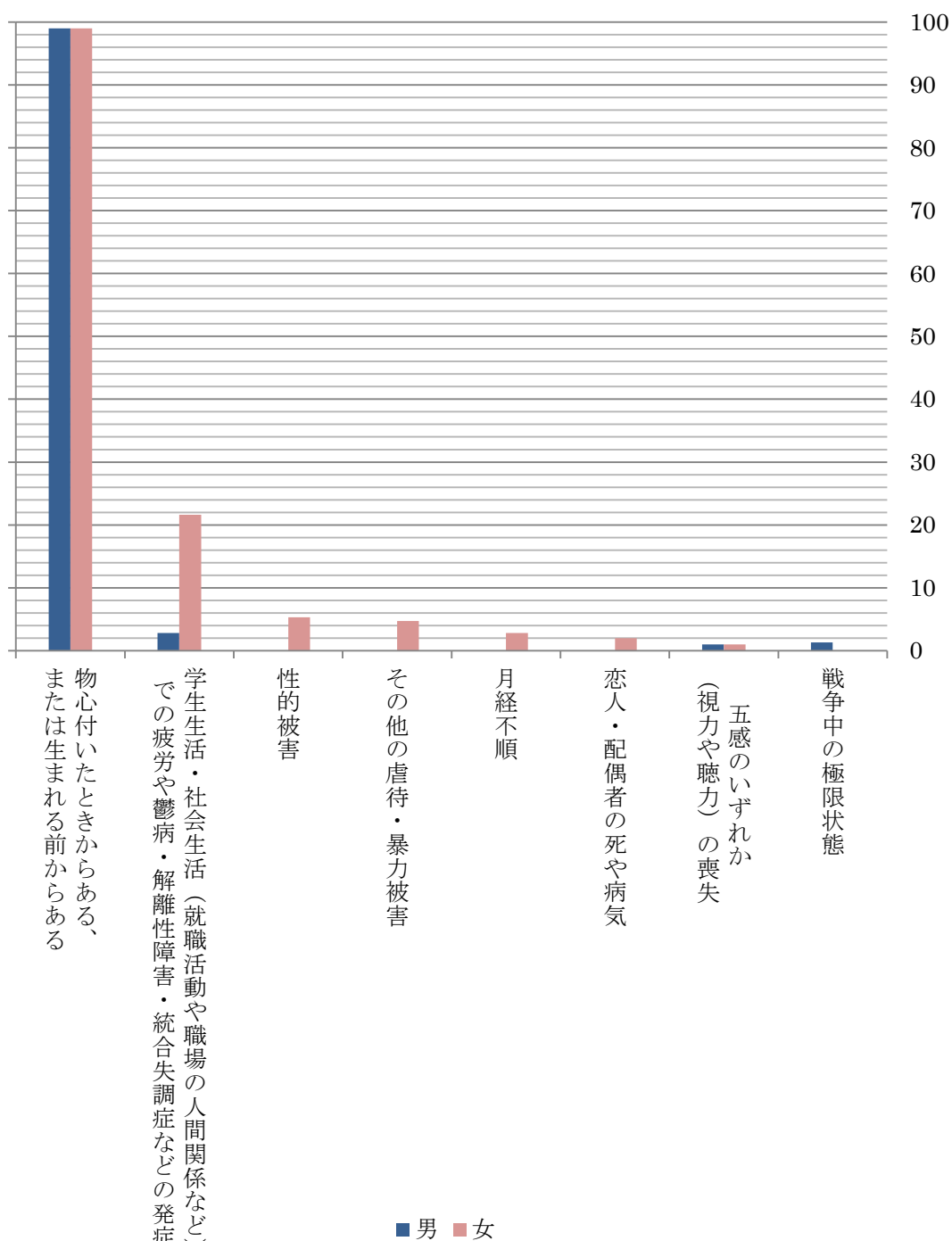
※ 0~9歳については、私による直接の調査、その子の両親による情報提供、保育士（保育園）による情報提供などに基づく。

※ 20~24歳の女性が最も多くなっている理由は、20歳未満の女子学生・女子児童のネット人口が成人女性よりも少ないことによるものと考えられ、実際には10代女性の共感覚者の数は20代よりも多いことが予想される。

※ 報告のあった時点での共感覚者の年齢を用いることとした。例えば、2005年に22歳であった女性Aと、2009年に26歳であった女性Bは、それぞれ20~24と25~29に含まれる。

※ 統計実施者である私岩崎純一は、この統計を始めた2005年時点の22歳とした。

#### 1.4 共感覚を得た要因 (2014/7/20) 単位 (%)



※ 一度共感覚を失っていながら、鬱病・性的被害・暴力被害などで再び共感覚が蘇った女性については、「物心付いたときから」に含めた上で、該当の各項目にも含めた。

※ 統計実施者である私岩崎純一は、「物心付いたときからある、または生まれる前からある」に該当する。

岩崎純一のウェブサイト

<http://iwasakijunichi.net/>

【参考文献】

DSM-5（精神障害の診断と統計の手引き）（2013） アメリカ精神医学会

American Psychiatric Association (2013). DSM-5 (5th ed.). American Psychiatric Press.

DSM-IV-TR（精神障害の診断と統計の手引き）（2000） アメリカ精神医学会

American Psychiatric Association (2000). DSM-IV-TR (4th ed.). American Psychiatric Press.

ICD-10（疾病及び関連保健問題の国際統計分類）（2007） 世界保健機関

International Statistical Classification of Diseases and Related Health Problems, 10th Revision.